

食糧供給源 南米に確保

将来の食糧危機に備え、南米に安定的な供給源を確保しようと、市民の出資で誕生し、アルゼンチンに農場を持つギアリンクス（中田智洋社長、美濃加茂市）や、同社に協力する隣国パラグアイの日系人農協の活動、農産物をパネルやビデオなどで紹介する常設展示場が29日、中津川市千旦林の観光施設「ちこり村」にオープンする。

「ギアリンクス」活動紹介

ギアリンクスは2000年に設立され、アルゼンチンに1250畝の農場を取得。収穫した大豆、トウモロコシの一部を日本に輸入している。一方、中田社長はパラグアイの日系人農協にも「母国・日本に食糧を輸出してほしい」と依頼して協力関係を構築。昨年も大豆960ト、トウモロコシ1000トが日本に輸出された。

これまで日本が頼ってきた米国では、日本の消費者が求める非遺伝子組み換えの大豆やトウモロコシの作付けが減少している。「このため、みそ、豆腐などのメーカーや飼料用トウモロコシを求める養鶏農家などから南米産への

関心が高まり、取扱量の拡大が期待されている」と中田社長。

パラグアイの 日系人農協も

「ちこり村」は1か月で約1万人の来場者があり、以前から南米産を原料にした豆腐などの加工品も販売してきたため、情報発信の場として選ばれた。

展示場の開設記念式典には、イサオ・タオカ駐パラグアイ大使や来日する日系農協の組合長ら4人も参加。みそや豆腐メーカーなど日本の需要家との交流を楽しみにしているという。

中津川で29日から常設展示



パラグアイの日系農協の一つ、イグアス農協の組合員たち（前列左端が中田社長）